

道徳科指導案

授業者： 授業協力者：

授業学級：6年2組（男子19名 女子19名 計38名）会場 6年2組教室

題材 「わたしの中の“優しさ”を見つめる」 1時間中の第1時

教材名「カーテンの向こう」（hospital window）短編小説 立石喜男

(1) 学習のねらい

美と力（組体操）を通して、友の動きに合わせて補助をしたり5年生にどう教えたらいいのか迷ったりしながら相手の立場を考えて行動したいと感じ始めている子どもたちが、「カーテンの向こうは、“かべ”だった」という叙述に触れ、主人公の“私”が自分自身だったら真実を伝えるかについて友とその理由を話し合う活動を通して、自分の行為や思いが「相手にとってもよりよいものになっているのか」ということに気づき、「優しさとは何か」について目の前の生活から考えていくことができる。

(2) 本時の学習材

「カーテンの向こうは“かべ”だった」という叙述

- 谷浜鍛錬会での協力、現在取り組んでいる「美と力（組体操）」での支え合いの様子、日常での友とのかかわりを思い浮かべながら、優しさについて考えていこう。教材「カーテンの向こうに」を聞きながら、主人公のヤコブは自分さえよければいいと思っているのか、相手のことを考えていないのではないかと感じていこう。このような意識を捉えたところで、本学習材を提示する。
- 本学習材は「カーテンの向こうは“かべ”だった」という叙述である。主人公のヤコブが仲間のためにうそをつき続けていたということが明らかになる場面である。学習材に触れた子どもたちは、結末の事実には驚きながら、なぜヤコブは真実を伝えなかったのかと疑問をもつだろう。その意識を捉え、自分ならどうするのか投げかけていくことで、相手の思いを大切にすることはどうすることなのか考えていこう。このように、相手の思いに立って考えていくこと、そのとき自分ができる精一杯のことをしていくことなど、優しさとはお互いを支え励まし合っていく人と人とのよりよい関係になっていくために大切なことだと気づいていくことが期待できる。

(3) 学習の展開

過程	学習活動	予想される子どもの動き	時	・指導 評価
課題把握	1 優しさのある行動とは何か考える。	・相手を思っで行動すること。 ・相手を傷つけない言い方ができる。 ・ヤコブは意地悪な人なのかな。 ・自分だけよければいいのか。一緒に生活している友のことを考えないのか。 ・カーテンの向こうは何だったの。 ○かべだったの。ヤコブはずっとうそをついていたわけか。	5'	・「優しさとは何か」子どもに問いかけ、子どもが感じている優しさを板書に整理していく。 ○「カーテンの向こうは____だった」という空欄部分を提示し、子どもの予想のつぶやきや発言を受け止めながら、学習材を提示する。
	2 本文を読み、ヤコブの行動や言動について考える。		7'	
展開	学習問題 ヤコブはどうして本当のことを言わなかったのか			学習材 「カーテンの向こうは“かべ”だった」という叙述
	3 自分だったらどんな行動や言動をとるか考える。	○ヤコブは友のために本当のことを伝えなかったのだと思う。 ○友に疑われ、自分勝手だと勘違いされてまでもうそをつく必要はなかったのではないか。	20'	・状況が読み取れない様子が見られた場合は、ヤコブが外の様子を語る叙述を示し、実は全てうそであったことを確認してから活動3に入る。 ○子どもたちが沈黙する間を大切にしながらヤコブの行動について自分の立場で考えるよう促していく。 ・子どもたちの発言を聞き、その理由について板書に整理していく。
終末	学習課題 自分だったら、このとき、どうする？			評価 目の前の生活から「やさしさ」とは何かについて考えることができたか。（発言・学習カード）
	4 クラスの日常生活での「優しさ」に思いを向けていく	・自分が窓を独占していると誤解されたくないから言う ○外の様子が患者の希望になっているから本当のことを隠した方がいい。 ○相手を思うからこそ本当のことがいえないときがある。 ・優しさって何だろう。 ・Aさんが給食当番でBさんを手伝っているのが優しいなと感じる。 ・注意することも、私は優しさだと思う。	8'	・ヤコブの「優しさ」と重ねて日常を振り返る。

2 本時に至るまでの子どもたちの姿

多様な個性と小さな“やさしさ”
をたくさん持った子どもたち

私たちが実習を通して感じている6年2組の子どもたちの姿がある。自分の世界を持ち、いきいきと個性を発揮している子どもたち。授業では様々な視点から教師の予想を超える意見が飛び交い、とても豊かな発想をもっている。その一方で、友が発言している最中でも、自分の関心を口に出したり、友の話に耳を傾けることができない姿も見られる。また、友や教師との関わりの中で、相手にとっては嫌な気持ちになるような言葉を使ってしまうといった姿も見られる。しかし、約3週間を一緒に生活した実習生の目には、様々な“優しさ”が写っていることも事実である。初めての美と力で不安そうな5年生に、「そうそう、大丈夫だよ」と優しく声をかけて安心させてあげようとしている萌楓さん。私たちが初めて授業を行う日、「緊張してる？」と優しく声をかけてくれ「うん、緊張してるんだ」と答えると、授業前に肩をポンポンとたたいて応援してくれた真理愛さん。校庭横で弱っている蝶々を見つけて、「一人で死んだらかわいそうだから…」と理科室から虫かごを借りてきて様子を見続ける聡彦くん。この他にも、気に止めなければそのまま通り過ぎてしまいそうな、心が温かくなる6年2組の子どもたちの“優しさ”に日々触れてきた。

私たちは普段生活をしていると、軽い気持ちで思わず相手を傷つける言葉を言ってしまうことがある。また、相手のことを思った行動や言葉がたくさんあるのに、あまり気に止めず、すぐに忘れてしまったりすることが多い。6年2組の、それぞれが輝く個性を持った子どもたちだからこそ、一人ひとりがもつ“優しさ”にもっと目を向け、お互いを受け入れ合える関係を築いていってほしいと教師は願い、本教材を選択した。イスラエルの病院を舞台にした「カーテンの向こう」では、登場人物ヤコブの相手を思った嘘に気づいた私が、真実を他の人に伝えるのかを考えることで、言葉を発する前に「この言葉は相手を傷つけはしないか？」と一度相手に思いを寄せることができるかもしれない。また、生活の中にある小さなエピソードを思い出すことで、クラスの中にもたくさん“優しさ”があること、そして自分自身も“優しさ”を持っていることに気付くことができるだろう。このように考えた教師は、学習問題を「ヤコブはなぜ事実を言わなかったのだろう？」とし、ヤコブが、そして子どもたち一人ひとりが持っている“優しさ”を見つめていく授業を構想した。

周りの仲間のことを思った行動や
言動を見せる奈緒さん、慶祐くん

遅刻をして教室に入れないでいる仲間に気が付くと、ずっと立ち上がり声を掛けに行く奈緒さんの姿が印象的であった。奈緒さんは、かっとなってしまい教室を飛び出してしまった仲間に気分を落ち着かせるために優しい口調で話しかけていた。また、クラスの友だちのことを考え、授業に集中できていない仲間の存在や、クラスで生活していくときに解決しなければいけない問題に誰よりも敏感に感じ、ひっそりと友の思いに立って行動や声掛けを行ってくれている。奈緒さんだけではない。慶祐くんも授業や生活の中で仲間の行動や考え方に疑問をもった時、「静かにしよう」「それってこうじゃない」「もっとこうした方がいいと思う」と友だちに注意を呼びかけている。

このような子どもたちの真っ直ぐに生きようとする姿から、本当の優しさとは何かを考えずにはいられない。自分の自由が相手の自由を阻害しているような状況を見過ごしてはいけな。それは相手を大切にするとということではないと思う。相手を大切にすると、お互いによりよく生きていこうとすること。だから、お互いを認め合い、批評しながらよりよい関係を築いていくことができる子どもたちに成長していってほしいと私たちは願っている。

自己理解から他者理解へ、可能性を
秘めた子どもたち

クラスで子どもたちと生活を共に過ごす中で、命を大切にしたり相手を気遣ったりする子どもたちの姿を見てきた。子どもたちには、一人一人にとっての「優しさ」や思いやりがあると感じた。しかし一方で、子どもたちの日常での行動や言葉に目を向けてみると、相手の気持ちを考えた関わりができていないのだろうか、と疑問に思う場面に出合うこともある。個性豊かな子どもたちではあるが、お互いを理解し受け入れるまでの関係性には至っていないと感じることも正直ある。前回の道徳の授業で、子どもたちは中学生の具体的なイメージを持つことをきっかけに、自分の長所と短所、今からできることについて考えた。活動の中で、長所や短所が書けない子どもや短所をたくさん書く子どもの姿が見られた。自分自身の短所を克服するために、今からできることを自分の言葉で思い思いに記述していた。そのような子どもたちの姿から、今の自分を変えてゆきたいという願いを感じた。

自分の弱さやよさを見つめ初めた子どもたちだからこそ、他者に目を向けることもできるのではないかと感じている。そこで教師は、このような子どもたちと「優しさ」について改めて一緒に考えていきたいと考えた。本時は「カーテンの向こう」を読み主人公の優しさと重ねながら「優しさ」とはどのようなものであるかを一緒に追求していきたい。日常にある友との温かい関わりに目を向けながら互いの優しさが共に育まれていくことを願って、本時を迎える。